第2回　役員訪問　聞かせてください

聞き手／常任理事　藤井美穂

・生年月日　昭和13年８月９日
・出生地　上川郡当麻町。３歳より札幌
・好きな言葉　『温故知新』

●札幌祭り　創成川の見世物小屋

藤井：ご幼少の頃の思い出からうかがいます。

長瀬：札幌神社のお祭り（現在の北海道神宮例大祭）ですね。当時は、創成川の上にサーカス小屋、お化け屋敷、オートバイのショーとかいろんな見世物小屋がずらりと並んでいてね。川の上に板を敷いて、その上に座るんですよ。中に入ると、板のすき間から川が見える。ある時、落下事故があって、危険だということで、今の中島公園に移りました。

藤井：ヘレン・ケラーにお会いになったことがおありとか…

長瀬：小学生の頃ですからもう5、60年前になりましょうか、選ばれた何人かと一緒に札幌市民会館でお会いしました。

藤井：それが医師になる動機でしょうか？

長瀬：強烈な印象を受けましたが、それが直接のきっかけではありません。可愛がってくれた中学の先生の「お前医者になれ」という助言ですね。

それと大学受験の頃に、日本では東大の次に北大に麻酔科が開設され、興味を持ちました。

僕と同郷の当麻町の古川幸道先生（北大麻酔学、初代教授）のご実家が私の祖母とすごく仲が良くて、それで、麻酔科というか医師になりたい意識を強く持つようになりました。

昭和19年、弟が1歳の冬に父親が戦争に出征。母親に連れられ、僕と弟が汽車で深川の実家に向かっている時でした、滝川で乗っている汽車が軍用列車に徴発されて、ここで降ろされた。寒く食べ物も何もない状態で何時間も待たされた。代替列車が来て、やっと神居古譚についたのは夜中の12時くらいでした。そこから母方の祖父の馬橇で音江まで。その間の寒さで、弟が肺炎にかかり亡くなった。私が小学校に入学する１年前のことです。触ると氷のように冷たいから「人が死ぬとはこういうことか」って幼心に思いましたね。これも医者になる契機の一つかな。

昭和47年5月　北大病院　病棟回診

●人工血管の移植手術と北大三内入局

藤井：医学生の頃の思い出をお話しください。

長瀬：医学部3年の頃、「脈なし病」の患者さん（18歳の女子高生）の手術に立ち合いました。

新任の杉江三郎教授（第二外科）が脈なし病の血管を人工血管に変える手術をしました。今みたいに麻酔設備はない。棺おけみたいな箱にビニールを敷き、氷と水を入れて、体温を下げて手術を行った。手術は大成功だったが、数日後に人工血管が詰まり、亡くなってしまいました。生涯忘れられない思い出です。

その後、高杉年雄教授の北大第三内科に入局。並木正義先生もいて、勉強させていただいた。胃カメラを習ったり、一緒に検診に行ったり、並木先生には親しくしてもらいました。

第三内科には同期15人が入局しました。入局後、教授に「君は来てくれると思ってた」ってうまいこといわれましてね（笑い）。入局したちょうどその年が、高杉教授が日本消化器病学会秋季大会をやった年なんですね。僕は大学院に入ったんだけど、15人のうち2人が実験の手伝いをさせてもらった。僕はラットの飼育係り。土曜も日曜も休まず餌をやりました。

●厚岸大火は病院で陣頭指揮

藤井：確か厚岸町立国保病院に派遣されたんですね。

長瀬：入局した1年目の12月に命令が出ま

北海道医師会　副会長　長 瀬　　清

した。4月に結婚したばかりでしたが、妻も一緒に。

病院では、もちろん一番下っ端。正月は、院長、副院長が出かけられて僕一人。その時、厚岸大火が起きた。火事の時には病院に責任者が必要になるわけで、僕が隊長。入院患者は50～60人位。どんどん飛んで来る火の粉で火事になりそうなら、患者を避難させなければならない。その判断は僕に委ねられている。火を見ながら、「これは危ない」と思いましたが、結局、患者さんを運ぶまでには至らず鎮火、一安心しました。

実はその時、家内が流産しそうで、寝たきりで動けない状態でした。自分の家にも火の粉が飛んできたが、病院に行かなければならないから、家内のそばに居るわけにいかない。留守を預かる責任者として、家内を家において病院に向かいました。幸い、隣に住む看護婦さんが面倒を見てくれて助かりました。

●今、生きるために、歴史を学ぶ

藤井：お好きな言葉は何でしょうか？

長瀬：「温故知新」。中学校の日本史の先生が一番最初に黒板に書いたのがこれだった。「今生きるために昔のことを知る。歴史を一生懸命学べ」と。それで歴史が好きになったと思う。

藤井：歴史って振り子じゃないかなと思うんです。ある方向に進むと、それを戻して均衡を保とうとするから。歴史が分かれば、先が読めますよね。

長瀬：10年後とか20年後を的確に読む人っていうのは、そういう流れがあって必ずそこに戻るだろうって予想しているんですね。急に思い浮かぶ先見の明というのではなくて、歴史の積み重ね。だから現代に生きてるし、昔の人は現代においても大変貴重な存在なんです。

昭和57年7月　リオデジャネイロ　コパカバーナの海岸

インタビューを終えて

ヒューマニスト　長瀬先生

常任理事　藤 井 美 穂

ＭＲの女性主人公が、“本当に患者さんのためになるのか”と自社の薬の販売に葛藤する、という内容の『ストロング・メディスン』（アーサー・ヘイリー著）を感銘した1冊にあげられました。こういう気持ちで薬を売ってもらいたいと、出入りのＭＲにお話をされるそうです。私も早速読みました。

一人ひとりが前向きに地道に努力しているから、阪神タイガースが大好き。小さい頃から「トラキチです」と語られるその熱情が印象的でした。